

# ※ 人生を照らす言葉

新連載 ①

文学博士 鈴木秀子

## キリストは必ず、 これらの苦難を受けて、 その栄光に入るはず ではなかったのか

「ルカによる福音書」二四章

永遠のベストセラーともいえる聖書。そこには現代人の生き方の支えとなる様々な言葉が宝石のようにちりばめられています。シスターである鈴木秀子先生に日々の出来事を織り交ぜながら聖書に秘められた人生の叡智を分かりやすく紐解いていただきました。



鈴木秀子——すずき・ひでこ

東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。聖心女子大学教授を経て、現在国際文学療法学会会長、聖心会会員。日本で初めてエニアグラムを紹介し、第一人者として各地でワークショップなどを行う。著書に「死にゆく者からの言葉」「愛と癒しのコミュニオン」など多数。

### 苦難の末に 十字架に処せられたイエス

イエス・キリストが生きたユダヤという国は当時、ローマの圧政下にありました。イエスの誕生以前、ユダヤの人々は長い歴史の中で自分たちを奴隷のような状態から解放し自由にしてくれる、現世的権力者であるメシア（救世主）の誕生を待ち望んできました。ですからイエスは万感の思いで迎え入れられ、人々はこの方こそ私たちの救い主だと尊敬し、信じ、従っていったのです。

ところが、ユダヤ民族の希望であった凛々しい青年イエスは、政治犯の嫌疑をかけられ、極刑である十字架の死を遂げてしまいます。皆に蔑まれ、面子を失い、唾をかけられて、誰もがそういう姿だけは見たくないと思うような惨めな状態で亡くなっていくのです。そうなる、いままでイエスに付き従っていた人々からは「あれだけ望みをかけていたのに、こんな形で裏切られるとは……」という思いが次々に湧いて出て、それまでの信望が怨みと憎しみに変わ

っていきました。ましてや一生イエスについていこうと決意していた弟子たちの失望感は、言うまでもありません。加えて弟子たちにも周囲から敵意が向けられ始め、ローマの兵士に命を狙われていた彼らは、身の危険を感じてエルサレムの街から散り散りに逃げ出しています。

「私たちが望みをかけた先生は、私たちを救ってくれる、どんな時でも力を与えてくれる、一人にはしておかないと、あんなに強くおっしゃったにもかかわらず、裏切られてしまった。自分たちが望みを託したことに、一体何の意味があったのだろうか」

逃亡の道々、イエスの二人の弟子たちが砂漠のような場所を歩きながらそのような練り言を口にしていました。すると、そこに見知らぬ旅人が現れて、一緒に歩き始めたのです。旅人は弟子たちの苦悩をすべて受け入れるように黙って話を傾け、二人もまた心がほぐれたのか、思いのたけを吐き出しました。

そして二人が胸に秘めた悲しみや失望感をすべて言い尽くした時、旅人は言います。

「預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けてその栄光に入るはずではなかったか」と。

旧約聖書では、ユダヤの地に救世主が現れることと同時に、その救世主が苦難の道を行くことが預言されています。旅人は二人の弟子たちにイエスはまさに預言者の言葉通りの道を歩かれたことを伝えようとしたのですが、二人にはその意味が理解できませんでした。二人はいつの間にか、この旅人に強く引きつけられ、離れがたい感情を抱くようになりました。先を急ぐ旅人に無理を言って同じ宿に泊まってもらい、夕食を共にしました。旅人はパンをちぎって二人に渡し、杯を捧げて葡萄酒を注ぎました。

二人がハッとしたのは、この光景を見た時でした。イエスが亡くなる前夜、弟子たちを集めて晩餐会を開き、パンと葡萄酒を分けながら「私はずっとあなたたちと共にいて力を与える。あなたたちを愛し続ける」と約束された言葉を思い出したからです。その途端、二人の目の前にイエスの姿が浮か

び、自分たちの声に黙って耳を傾けて、悩みを消そうとしてくれた旅人こそイエスに違いないという確信を懐くのです……。

以上は「キリストの復活」に関する聖書の一部ですが、私がここで特にお伝えしたいのは、イエスが生前「私は世の終わりであなたたちとともにいる」と約束され、「苦しみで終わりではなく、苦しみがあるところに、それに勝る恵みも同時に与えられる。苦しみを乗り越えて一人ひとり栄光に入っていく」

とおっしゃったことです。イエスは世の終わりで私たち一人ひとりと共にいて、苦しむ人のそばで、常に力を与え続けておられます。それは決して二千年前の聖書の世界の話ではなく、現代に生きる私たちにとっても同じなのです。

### 絶望の中で見えてきた 一筋の光

最近、ある五十代の男性からこのような実話を聞きました。その男性は十年前、大きな会社でクレーム処理の仕事をしていました。